

氏名	リュウ ジュン フク 劉 潤 福
学位の種類	博士 (文化財)
学位記番号	博美第270号
学位授与年月日	平成21年3月25日
学位論文等題目	〈作品〉青磁香炉、青磁浮牡丹文香炉 〈論文〉龍泉窯青磁の伝統技法と現代技法の比較研究 —宋代「青磁香炉」の復元を中心に—
論文等審査委員	
(主査)	東京芸術大学 教授 (美術学部) 島田文雄
(論文第1副査)	〃 准教授 (〃) 片山まび
(作品第1副査)	〃 教授 (〃) 豊福誠
(副査)	〃 〃 (〃) 増村紀一郎
(〃)	出光美術館 学芸員 金沢陽

(論文内容の要旨)

伝統陶芸は現代陶芸の源であると考え、伝統美学に基づき、伝統造形、伝統装飾などの伝統技法を研究することによってより現代的な発想が期待される。伝統陶芸の研究は現代陶芸研究の基礎と位置付け、伝統技法と現代技法の比較研究を行う。

中国の古陶磁は違例が多く残っており、世界中の美術館及び愛好家に収蔵されているが、筆者は最も中国陶磁を代表し優れた陶磁は青磁であると考え、龍泉窯は青磁技法の高度な水準を有している窯として世界に知られている。そして龍泉窯の発展史も殆ど中国陶磁の発展史の終始を貫いており、最も歴史を有する青磁の一大産地である。

筆者は龍泉窯青磁の技法に注目し、宋代「青磁香炉」の復元を通じ、伝統と現代技法を比較研究する。

筆者の復元研究作品は出光美術館所蔵の「青磁香炉」と「青磁浮牡丹香炉」である。「青磁香炉」は半筒形の三足の香炉で、12～13世紀の龍泉窯作である。香炉の口縁端部は内に折り返し平縁となり、側面には五本の弦文がめぐらせ、裾には小さな脚が三方につく。素地は灰白の土である。釉薬は粉青色の発色を呈している。「青磁浮牡丹香炉」も南宋時代の龍泉窯作である。形態は半筒形の三足香炉であるが、日本に伝来し、水指として使われていた。底が落ち込み、脚が浮き足となる。外側には堆線と牡丹唐草文が表されている。四面にはそれぞれ牡丹文が表されている。12枚の葉と4個の花はまったく同じ模様であるため、石膏型で型を取り、貼り付けたものだと考えられる。胎は灰青色の精良な土で、内底中央には孔があり、内底と底中央部を除き灰緑色の釉薬が施される。

香炉の造形は実に青銅器の写しであり、伝統造形の代表的な一品である。古代中国では、香炉は単なる装飾品ではなく、宗教的な意味もこめられている。青磁の釉色は常に文人、君子の徳に喩えられる“玉”と並べられて、中国の伝統的な審美精神を良く表現している。宗教的かつ文化的な役割を担い、宋代龍泉窯香炉は中国文化を代表する陶磁品であろう。従って、宋代「青磁香炉」及び「青磁浮牡丹香炉」の復現によって、中国陶磁の伝統技法への理解も深められることができると考えている。

本研究は日本における復元製作と中国における復元製作を比べ、伝統技法と現代技法を比較する研究である。

日本の原料と技法及び中国の原料と技法による宋代「青磁香炉」の復元研究は異なる材料での復元研究及び異なる技法での復元研究である。新たな試験データを提供することによって、今後の研究に参考

になるであろう。復元制作を通して陶芸伝統技法を作品とともに伝えていくことができる。また作品に秘められた宋代の文人の美意識を伝えていくことを目的とする。

龍泉窯の伝統技法と現代技法について、中国では、1959年に浙江省軽工業庁、1986年に中国科学院上海珪酸塩研究所の『龍泉青磁研究』、また、日本では、平成16～18年度に『13世紀～14世紀の龍泉窯陶磁技法“青磁大皿”の復元的焼成研究』（研究代表者：島田文雄）が行われ、筆者は研究補助者としてこれに参加し、青磁について釉薬、歴史などを学んだ。これまでの諸先学の研究業績を踏まえながら、龍泉窯の伝統技法と現代技法について比較し、宋代龍泉窯青磁「青磁香炉」を復元制作する。

龍泉窯青磁は時代とともに、釉色、造形、作風が変化を遂げている。また制作においては原料の調整、作品の成形、乾燥、装飾、施釉、焼成などの工程があり、原料産地、窯の燃料、天候などの影響があった。これらの要素と条件を組み合わせて、多くの名品が作られてきたと考える。

諸要素と条件により龍泉窯青磁は一品ずつ異なる釉色を呈するが、本研究の「龍泉窯青磁の伝統技法と現代技法の比較研究」では各地の原料を取り入れ、収縮率や釉色と言った相応しい材料を厳選し、より近い復元作品を制作することを目標とする。

論文は序章、第一章、第二章、第三章、終章を分けて論じる。

第一章、龍泉窯青磁について研究背景を述べる。

「看陶知政」（陶によっては政を知る）という諺は中国ではよく知られる。陶磁器は社会の政治、経済、文化などの諸要素の影響を受け、制作が続けられたと考える。なかでも宋磁は、高揚した文人意識による内在的な美意識を追求してきた。宋磁の多くは文人美意識の影響を受けながら、端正な造形を整え、後に簡潔な釉薬をかけ、シンプルな装飾で内在的な美意識を表した。

また、龍泉窯青磁は民窯でありながら、皇室、文人官僚の注文を受け、独自のスタイルを完成した。龍泉窯青磁は言わば、宋代の文人文化の隆盛により、「文人の美意識」と「庶民の美意識」を兼ね、それを具現させたと言わざるを得ない。

第二章、伝統技法と現代技法を比較し、龍泉窯青磁の技法を明らかにする。

龍泉地域は製磁用原材料が極めて豊富であるが、産地によって品質も異なる。昔の職人は外観、色、匂いなどの要素を把握し、経験によって泥漿を調合したと思われるが、現代陶芸工房は陶磁原料工場に注文し、テストピースの焼成結果によって、調合の割合が決められる。伝統的な龍泉窯青磁釉薬、焼成については、まだ謎が多いが、戦後、歴史資料、道具、窯元に対しての調査研究が多く行われ、徐々にその内実が解明されつつある。

第三章、復元制作

実際に復元するにあたり、素地、釉薬の化学組成、成型技法、焼成方法などが互いにどのような影響を与えたのかを分析、検討する。そして、試験の研究結果に基づき、龍泉窯青磁技法を用いた出光美術館所蔵品の復元制作をする。

（博士論文審査結果の要旨）

中国陶磁のなかで最も大きな部分を占める窯のひとつである龍泉窯青磁についての復元成果をまとめた意欲作である。前半部では、復元対象作品の時代背景や精神性について可能なかぎり論じ、表層的な復元ではなく、古作を理解し、学ぼうとする謙虚な制作態度を示しており、好感を持たせる。

また後半部では、日本および中国における数多くの実験と詳細なデータを記しつつ、その失敗と成功の要因について論じている。ここに提示されたデータはきわめて貴重であり、日本人研究者では知りえ

ない貴重な情報も記されている点で注目される。

対象者が奇しくも論じているように、科学分析と復元は異なり、復元対象作品の精神性および歴史背景の理解、飽くことのない実験データの積み重ね、古作に対する謙虚な態度を要とし、本論はそのすべてを兼ね備えていると言える。今後、本論文は今後の龍泉窯復元において、必ず参照されるべき重要な研究のひとつとなると目され、学位を授与するに十分な資格を持つものと考えられる。

(作品審査結果の要旨)

復元制作の対象は出光美術館所蔵の「青磁香炉」「青磁浮牡丹香炉」の2点である。復元制作は龍泉窯の盧氏工房と日本の東京芸術大学にて制作された。

「青磁香炉」は青磁釉の濃淡によって生まれた力強い香炉である。竹の弾力を利用して削られた弦文と串による水平に刻まれた線が造形に緊張感を醸し出している。「青磁浮牡丹文」は貼花文の牡丹と葉が貼付けられ、竹筒から押し出された泥粘土が線描によってあしらわれている。青磁釉の溜まり、濃淡によって文様が際立ち、おおらかで大胆な作品である。この2点は南宋時代の作品であり、いまから700年前の技法調査はほとんど不可能であろうが龍泉に何度も足を運び、現代の龍泉工房から推測した南宋時代の制作法を探っている。紫金土、烏釉などが青磁制作に大きな鍵となっていることを検証している。

日本での復元研究は日本の原料による制作などで困難をきわめていたが、素地調査試験、2,160個の青磁釉試料、焼成試験など多くの試験を行い、失敗を積み重ねることでより近い復元制作ができたことは高く評価される。中国での復元制作作品は、出光美術館の所蔵品と比べてみてもほぼ一致していると言えよう。復元を通じ明らかにされた数々の中国、日本の制作法などの報告は大変意義があり優れていると評価する。

(総合審査結果の要旨)

龍泉青磁の伝統陶芸の研究は現代陶芸研究の基礎と位置づけ、中国陶磁を代表するものが宋代の陶磁器と考え、伝統技法と現代技法の比較研究を行なっている。

出光美術館所蔵龍泉窯「青磁香炉」「青磁浮牡丹香炉」の復元制作を研究目的としている。論文ではそこに秘められた宋代の時代背景を探り、文人の美意識によって生み出された宋代の陶磁器、シンプルで洗練された青磁香炉の復元制作を目指した。

龍泉窯青磁については、宋代文化はまさに文人文化の最高峰であるととらえ、宋代陶磁は文人官僚が主導する陶磁として確立されたと見る。宋代青磁に秘められた宋代文人の美意識を現代に伝える事を試みている。龍泉窯の伝統技法と現代技法を比較し、龍泉窯青磁の技法を調査した。中国での伝統技法、日本での現代的な方法で復元を試みていた。

中国からの留学生であり、中国の現地調査、現地での復元制作を通じた陶磁技法、陶磁原料、青磁焼成などの詳細な報告は外国人では到底調べられない魅力に満ちた内容が記載されており、青磁制作に欠かせない紫金土や烏釉の制作法、使用法など大変意義のある、興味深い内容が記述されている。日本での復元研究は各地から取り寄せた様々な原料の調査試験を繰り返した。青磁釉の試料は2,160個にも上る調査試験を繰り返しており様々な失敗を繰り返しながら復元制作が成された。論文においては中国陶磁、特に宋代陶磁に対する精神性、感性、技法など日本との比較研究がなされており、貴重な、ユニークな資料として高く評価できる。